

麦穂祭——久高島の祭祀

高橋 六二

はじめに

これまでにずいぶん多くの祭りを採訪してきた。それは日本の古代文学を考えるためであった。その際に古代文学と祭りとはどうかかわるのか、ということをもいつも気に留めていた。祭りは、民俗はと言ひ替えてもよいのだが、神話・歴史・生活といったものをよく含み込んでいのではないか、というのが基本的な考え方であった。このことは近年になって漸く自分の中に定着しつつある。

沖繩県久高島には昭和五十三年以来しばしば出向き、平成元年春をもって年間四十近い祭事のほぼ全容を確かめることができた。ここにはその中から麦穂祭を取り上げることにする。この祭事は、いまだ詳細な報告書がないこと、久高島の神話とかわわっていること、琉球王府との関係が深いこと、等の理由からである。採訪は昭和六十・六十三年の二度行なったものである。

一、祭事次第

久高島には穀物に関連する行事が次のようにある。すべて旧暦で行なわれる。各祭事のミンニーというのは祭日で壬・癸の日をさす

が、実際はアラミンニー・ウットウミンニーといつて甲・乙を含めた四日間の中から選ばれる。チチニーは戊・己の日である。

ショウグワテイ 一月一日と三日

ショウグワテイマツテイ 一月中旬ミンニー 麦の穂祭り

ウブスシガナシースウグワンダテイ 二月中旬ミンニー

サングワテイマツテイ 三月中旬ミンニー 麦の収穫祭り

ダングワテイマツテイ 五月中旬ミンニー 粟の穂祭り

ルクグワテイマツテイ 六月中旬ミンニー 粟の収穫祭り

ファティラニ 九月下旬チチニー 麦の初種播き

トゥクリンブエー 九月

イチリグチ 十一月十三日

ウブスシガナシースウグワンドゥキ 十二月下旬ミンニー

ショウグワテイはさまざまな内容を含んでいるが、その一つとして芋の豊作祈願がある。二月・十二月のウブスシガナシーは健康・海上安全の祈願と願解きだとされているが、五穀の由来譚(後述)に基づく動きがある。トゥクリンブエーは麦の種播き後の少し芽が出た頃に、トゥクリンガー・イシンミー(ともに井泉)に麦の豊穰を祈願する。イチリグチはアミウルシという大漁祈願の祭事の中で麦

の豊稷を祈願するものである。残るショウグワティマッティ・サングワティマッティ・グングワティマッティ・ルクグワティマッティは既述のように、麦・粟の穂祭り・収穫祭りとしてそれぞれ対応するものである。また穂祭りが男の祭り、収穫祭りが女の祭りだともされて対応している。さらに二つの穂祭りはともにマブッティマッティともショージマッティとも言われ、ショージは掃除・精進の意で喫ぎのことであるが、マブッティの意は不明である。祭時に供える粥状のものを島人はマブッティと呼んでいるが、ことばの意味はわからないという。池宮正治氏の御教示によればマミキ(真神酒)かというが、あるいは真穂神酒の意であろうか。ちなみに久高島ではこの一・三・五・六月の祭りに七月のウブマミキ、八月、十月のマミキグワを加えてナナウマチーと言うが、こうした考え方は沖繩各地にあるウマチーと共通している。そしてここで取り上げるのは前述のようにいくつかの呼称があるが、王府の儀礼にならって表記は麦穂祭で統一しておくことにする。

ハカイメー 準備はまずノロ(司祭者)による日選びから始まる。そして一月十六日以降に家々で行なわれるハンジョーブエーは、ウムリングワー(家の祭事の司祭者)が繁栄を祈願するものだが、ヤーノシ(家の畝い)の意味もあるというからこの祭事を意識してのものかもしれない。

具体的な動きは前日からである。タマガエー(神女)全員がンチャメーヌハナ(花米)とウコウ(緑香)をミリアムトゥ(外間ノロ家・久高ノロ家・外間殿)に供える。もとは船持ちの家からも供えられ、三日前に御嶽に供えたというが、今は三家で拜むだけである。別に、マブッティ用の米(昔は麦)、ミキ用の平麦(昔は麦と

芋)をそれぞれの所属するアタイ(当番の家)に持参する。これがハカイメーと呼ばれる。祭事は外間殿と久高殿という村単位の祭場で行なわれ、それぞれに供えるマブッティ・ミキの配属は決まっている。マブッティは外間殿に七つ、久高殿に五つを供えるが、それを用意する家々の集まりをイティンニー・ナンソニーと言う。しかしそれぞれを構成する家相互の関係は、もう島人にもわからなくなっている。ミキの場合は地割制の組によっている。これは十組に分かれてそれぞれ十五戸から成るのが原則だが、現在では戸数の欠けた組もある。各組には組の親とミキアタイがいて各祭事のミキを準備する。この麦穂祭ではミキを三回用意することになっているが、それぞれ二組ずつの分担が決まっている。

またミフー(三種)が採取される。現在はノロが自分の畑から青いのを三本採って来るが、もとはノロはノロ地から、根人はニー地から、アカチュミー(五穀神の司祭者)はハタス(種物を初めて播いたという聖地)から採って来たものらしい。その他、ハブイ(蔓草のかぶり物)・シキダムトゥ(すすきを束ねた敷き物)・フカラク(魚)などが用意され、担当が決まっているものもある。

フバナブエー 前日には別にまた家毎に、朝、屋敷の神にフグインバイ(握り飯)を供えたあと、フバナブエーが行なわれる。ウムリングワーが高膳にムイバナ(盛り米)とサラマウニー(粥・飯)・二十四香・麦穂を載せ、火の神(台所に祀る)・トウパシリ(一番座の東南の柱に祀るタマガエーの神)・床の神に供えてウブティンシ(イザイホーでいただいた神霊)の祈願をするものである。これももとは三日前から行なったと言い、ンチャティオーシ(神慮)で供え物をあおいだとも言う。そのムチメー(祈りのことば)は次

のごとくである。

おー尊やー 黄金日^{オウゴンニチ}や 正月にうるしの アラホバナガシー
 はばしようこう むすじようこう 丑年^{ウシトシ}ぬ黄金年……また 生
 まれ日に とういてやー ウシルシヌフガニルシガナシーや
 ウミティムンガナシーら トウバシリ ミーンナカ はばしよ
 うこう むすじようこう うしやぎのーちゆーてい 一年中の^{いちねんじゅうちゅう}
 やー まりんしろうしゅうてい……モモハメーヌチチフアナ
 やー うていりゆー うちふあーが イザイホー ナンチユホ
 ー ていらしんぎやしんしろうちやのや ウプティシジノハミ
 サマー サキシユラノハミサマ……

冒頭の一部の要所を摘記したものである。不明句も多くあるが、大意は、今年丑年の正月のよき日にアラホバナガナシーを祀り、また丑年の神様、火の神様、トウバシリトウバシリの神様、床の神様を祀り、イザイホーでいただいたウプティシジの神様、すなわちサキシユラの神様(を祀り)、といった内容かと思われる。

朝マッティー 麦穂祭は二日間にわたって行なわれる。第一日の早朝、村頭は外間殿にミョーブ(赤い布)を、タムトウミヤーにミョーイ(白い布)を張り、マブツティとミキを受け付ける。マブツティは容器に入れられて高膳に、釘付きのグシ(五節あるダークの幹で矢になぞらえたもの)・水(もとは塩)・匙とともに据えられている。ノロはその膳に麦穂を置いたあと外間殿のウプグイで拝み、ノロ付きのウンサク(神酒を捧げる神女)二名とアシディケエー(走り使い)一名を伴ってクボー御嶽へ行く。そこでンチャメーヌハナ・ウコウを供えて拝み、アダカの葉を七本ずつ四束採取する。そしてヤグルカーでショージをして白衣装に着替え、パケツに水を

汲んで持ち帰る。一方、八時半過ぎに村頭の触れがあると、タムトウ(六十歳以上の神女)たちは白衣装を着てハブイをかぶり、フバオージを手を外間殿に集まる。神人^{カミヤ}たちも所定の座に書いて待機している。

九時半過ぎ、ノロたちが戻るとタムトウたちも定位置に着座し、朝マッティーが始まる。ノロはまずナカンホカマの家のガジュマルの木のもとにあるイビに麦の穂を供え、拝む。この家は、あまりはつきりした話ではないが、久高島の始まりの家だとか、久高島の始祖神フアーガナシーたちが初めてやって来た家だとか、五穀の始まりの所だとか言われる。あるいはアマミキョ・シネリキョが久高島に五穀の種を持って来た所だとして、クボー御嶽と同位のイビだとも言われたりする。

ノロはマブツティ等の供えられた高膳の並ぶ庭に戻り、その膳の前に東方に向かって立つ。膳の前にはチブルガーキ(瓢箪の容器。五穀の種が入っていたものという)が二つ据えられ、中にヤグルカーの水と麦穂が入っている。ノロがマブツティのふたをとって祈願すると一同もそれに合わせて拝む。祈願の内容は聞き取ることとはできないが、豊稔・大漁・海上安全を祈るのだという。一段落するとノロはアダカの葉でマブツティを四回あおぎ、そしてニードムトウ(シキダムトウ)に腰をおろす。するとウンサクがチブルガーキを差し出し、ノロはそれを飲む(しぐさをする)。

それが済むとノロはタムトウミヤーに着座し、ミキの饗応が始まる。まずニーブトウイ(柄杓取りの意で男の神役)のミキがウンサクによって神々に供えられたあと、ノロ・根神^{ネガミ}・神人に捧げられ、また村頭のミキがノロ以下、タムトウたちにも捧げられる。この間

の動きは複雑に交差して進められ、しかも厳肅に行なわれるもので、他のマツティーの時には同様になされるほどの重要な作法であるが、今は詳述を略しておく。これが終わって十時、外間殿での祭事は済み、一同は久高殿に向かう。久高島は王府時代に外間村と久高村とから成り、祭事が二ヶ所でなされたり、ノロ以下神女たちが双方に分かれていたのなどもそのなごりである。

十時過ぎから十時半ほどの間に、久高殿でもアシャギ（聖屋）とウドゥンミヤ（神庭）を中心に同様に行なわれる。ミキの饗応が終わると一同は散会するが、男の神役は立ち上がり行ってマブツティを一口いただいて帰る。もとは正人（十六歳以上の男）も皆いただきに来て健康の願いをしたというが、今は神女たちが自分の家に戻り、火の神に供えるように変わっている。以上の朝マツティーは外間ノロの司祭するものだと言われる。

このあと、外間殿と久高殿ではそれぞれノロと関係の人々数人で、握り飯・魚等を供えて五穀の御恩を祈る。

タマツティー 第一日の午後、またミキが用意され、四時過ぎから五時頃までは外間殿で、五時半近くまでは久高殿でタマツティーが行なわれる。朝マツティーと違うのはマブツティの膳に替わってミキの膳が据えられ、それに向かってノロがンチャティオージであるおぐ点である。このタマツティーは久高ノロの司祭するものだといふ。久高殿の祭事のあと、関係者だけでバイカンヤ（イラブーウナギの燻製小屋）で大漁の願いがなされる。

タマツティー 第二日目の、本来は夕方に行なう祭事を、現在は早朝に行なっている。午前六時半近くから七時近くまでは外間殿、七時過ぎまでは久高殿で、それぞれミキの饗応がある。このタマツ

ティーは根神の司祭するものだと言われている。

二、アラホバナガナシ

こうしてわかることは、久高島の麦穂祭は、まず家単位のものとして村単位のもので交錯してなされていることである。フバナブエーは家単位のものであるが、そのムチメーにアラホバナガナシとあるのは注目される。これによってフバナは穂花の意であることがわかり、フバナブエーは麦の新穂花の神を祀ることによってその神女の霊力の更新を祈願するものだ、と理解される。つまりそこには、麦の霊魂と神女の霊力が同質的に見られていると言えるのではあるまいか。

村単位の朝マツティーで麦穂がマブツティとともに供えられ、チブルガーキにヤグルカーの水とともに入れられているのも注目される。マブツティはもと麦の新穂をすりつぶしたシルマン（神酒の一種）だったのかもしれないし、チブルガーキのそれは穀種の取得の神話（後述）にちなむものであったろう。ノロがアダカの葉束でマブツティをおおぐのは、浄めと醸成の促進をはかっているのだから、麦穂入りのチブルガーキの水をいただくのは、神から麦種を授かってノロとしての霊力を再生させることを示しているのだから。こうした動きは基本的には神を迎えて祀る様を映していることになる。その中心は神にマブツティを捧げることにあるかに見える。しかし神話幻想が複合しているようにも見受けられる。アダカはその種が穀種とともに得られた聖木であり、ヤグルカーの水は穀種の入った白壺を得るために醸ぎをした聖水だと伝えられている。この限りでは、ノロの動きは穀物取得の神話を実修しているのだと見て済

ましてもよからう。だがノロがチブルガーキの麦穂と水を口中にした時、一つにはマブッティを醸成させることと、もう一つにはその体は一種の畑と化して新穂花を生育させる、いわば麦の母胎と考えられていたのではあるまいか。つまりそこには神話の始源と現在とが複演されていると見られるのである。

ノロがタムトウミチャーに移ってからのミキの饗応は神との饗宴にほかならない。しかしその時のノロが麦の母胎としてあるのであれば、タムトウたちもミキを飲むことによってそれと同化しているのだということにもなる。タマッティが二日にわたって繰り返されるのはその進行・深化がはかられているのだとみられる。そして古くはこの朝マブッティの時には、その祭事に参与しないウンサク以下の女たちで、生理中のものはイラブウナギの捕獲小屋に慎しみ、産婦は産室を出ていなければならなかったというし、二日間は誰も畑に出てはいけなさとされたという。それはここに麦の結実——誕生が強く意識され、期待されていたからだろう。

朝マブッティの最後に男たちがマブッティを口にするのは、どう考えればよいだろうか。マブッティは神を祀って饗応するための神酒であり、麦種の靈魂——アラホバナガナシーという神靈の宿るものであった。それはノロの力によって醸成・昇華をとげたものである。これを男たちが口にするのだから、男たちもまた麦の神靈——聖なる種を授与されたことになる。かくて穀物と子孫の繁殖・豊饒がもたらされるとした、それが男の祭りと言う由縁であったのだらう。

三、うずもれた神話

ナカンホカマ家での儀礼はやはりおかしい。麦穂祭の由来にかかわる重要なことが隠されているのだから、既述のこと以外は今のところなにもわからない。想像できることは、王府との関係、重要な神女との関係などで特別な事由があったのかもしれないが、ノロがわざわざ麦穂を供えたり、五穀の由来の断片が言われたりするのだから、その点をなお探索する必要があるのだろう。

久高島は五穀の発祥地として琉球国の正史にも記されている。それは天然に生じたとするもの、アマミキヨが天から授かって播いたとするもの、伊敷泊に種物の入った壺が流れ着いたとするもの、の三種類に分かれている。『琉球国由来記』はそのすべてを収めているが、王府としては天から授かったとするものを正伝としようとしているかに見える。ナカンホカマ家についての伝承の断片はこれと重なりそうだから、そこにはいわば神話がうずもれているのかもしれない。

王府では二月に麦ノミシキヨマと麦穂祭と二つの公事を行なう。

これについては『琉球王府の麦ノミシキヨマと麦穂祭』(小野重朗先生奉寿記念論文集『近刊予定』)に述べたから詳述はしないが、麦ノミシキヨマは国王が久高島に行幸して靈力の再生をはかるものであった。それは聞得大君が久高島の聖なる麦の初穂を嚼んで国王に勧める、という儀礼によって成されたと考えられる。ありかたはノロとマブッティとの場合と同じである。そしてこの行幸はアマミキヨが天神地祇を祭ったのに由来するとあるから、国王はアマミキヨのそれを再演しているわけである。

ただ久高島の伝承には少し違いがある。『琉球国由来記』の久高島古老の俗説には、アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻が伊敷泊で得た白

壺に、麦・粟・黍・籾豆・檳榔・アザカ(アダカのこと)・シキョの七種が入っている。これを所々に蒔くと、

数種ノ内、麦ハ春成熟ス。故二月、麦穂祭ト称、有祭礼也(略)。此麦成熟時、一捧ヲ朝廷。聖上詔宣ク、是レ人民養育スル穀物ト。御歡喜不_レ斜。因_レ妓、隔年一次、二月日撰、行_三幸于久高島。神祇御祭礼始ルト、謂伝ナリ(略)。

とあつて麦穂祭と行幸の由来(起源神話)になつてゐる。

また『遺老説伝』では白樽夫妻と人名が変わり、屋久留川での沐浴のことがあり、白壺には麦三種・粟三種・豆一種が入つて古間口の地に播くと、

節、正月に届るや、麦穂出発すること、甚だ常の麦と異なる。白樽、深く之れを奇異とし、之れを禁城に奉獻す。二月に至り、其の麦已に熟し、恭しく吉旦を扱び、其の麦を奉獻す。王深く之れを喜び、而して之れを頂戴し、即ち人をして神酒を醸し、以て各処の森嶽を祭らしめ、次に百工に賜ふ。此れよりの後、五穀豊饒し、子孫繁衍し、遂に以て邑と為る。之れを名づけて久高島と曰ふ(略)。

のごとく展開して久高島の村建ての話になり、省略部では「黄金の瓜種」の話になつて行幸の由来を説いている。これについても「久高島由来譚」(跡見学園短期大学紀要26、平成二年刊)に論述したので参照されたい。ただここで注目してよいのは麦穂祭の行なわれる月のことである。由来記に二月とあつたが現行では正月である。

それは説伝の「節、正月に届るや……」によつてゐるのかもしれないが、禁城奉獻のことは見られない。説伝では二月の奉獻のことも述べられているが、それは行幸・麦ノミシキョマの時か王府の麦穂

祭の時のことなのだろう。すると久高島の麦穂祭が正月に行なわれるのは、説伝の正月を継承し、しかも二月の王府の公事の内容を移行させている部分があるのかもしれない。なお説伝と同じ節立てのものに『久高島由来記』があり、この二つは久高島の外間根人家の伝承であつたのだろう。文中に白樽の長男が外間根人となつたとあり、末尾に外間根人と祝女が毎年王城に出仕することが記されているからである。

久高島には別に、アカチュミーとシマリバーとが瓢箪に入った種(麦・粟・小豆・米・アダカ)をハタスに播いた、という話もある。これは大里家の伝承らしく、その関係者は二月・十二月のウブヌシガナシーの祭事に大里家・ヤグルカー・ハタス・伊敷浜と巡つて立願・願解きをする。その二月の場合のはたぶん一つの麦穂祭であつたのだろうし、するとノロを初めとする人々が分かれてアカララキにまで出向くのは、ひょっとして国王の行幸時の出迎えのなごりなのかもしれない。

いずれにしてもこれらの久高島の伝承からは、ナカンホカマ家のイビに麦穂を供えることの謎は解けない。想像をたくましくすれば、説伝の古間口の地に相当するような所かもしれないし、近くにはアマミキョの腰をかけたという石があり、アマミキョを祀る拝所もあるから、アマミキョが穀種を持って来た所というのが当たつてゐるのだろうか。

おわりに

久高島の麦穂祭では、現在、神歌が歌われることはない。しかし「安泉松雄資料」(古典と民俗学の会編『沖縄県久高島資料』白帝

社、昭54刊)には、

あかつみーが ばいていめーぬ

朝川の川のうびー

五清み七清み 御先ら うさぎのーち

前男前女 五清み七清みそーじ

きれーとて

あむとから あさんはり 前男前女

んなまじり だきふみて

一年中どーがんぢゅーさ 体じゅらさ

島ん旅ん儲かふう うたびんせうり

というオモロが収められている。清浄な麦穂を供えて村人の健康・果報が祈願されているのだが、どのような状況下で歌われたかは不明である。たぶん久高ノロ家に伝わっていたのだからし、「あかつみー」はすなわちアカチュミーのことであるから大里家の伝承を踏まえているのだろう。ノロがマブツテイをあおぐ時にも皆で歌ったものであろうか。また同資料には二月のミシクマ遊びのことが記されているが、これも現在は行なわれていないし、状況は不明である。「農作物の害虫が発生しないで、豊年になるように祈願する。ヤグルガーの水で清めて行う」とだけあり、これで見える限り虫払いのようであるが、それならば三月にハマシグがある。しかし「ミシクマ遊び」とあるのだから、王府の麦ノミシキョマが行なわれていた時代のものとしてあったのだろう。

久高島では今はもう麦も粟もほとんど作ることがない。それでも麦・粟の穂祭り・収穫祭りは行なっている。それもクニガミといわれる主要な神役のほとんどが欠員のままに、である。たぶんそれ

は、祭りには人生儀礼がともなっているからかもしれない。麦穂祭の場合は麦の穂孕みと懐妊が同次元で考えられ、神女の霊力の更新がはかられて豊稔が期待されていることを見たが、五月の粟の穂祭りにはタムトウイワエーがあつてタムトウという神女の誕生儀礼がある。たとえ麦・粟を耕作しなくなつてもノロがいて神女がいるかぎり、つまり人が生きているかぎり、久高島の人々は麦・粟の祭りも実修して始源に回帰していくのだろう。

久高島の麦穂祭を以上のように読んでみた。これを古代文学と置き替えてみた時、そこに神話の発生と、毎年その幻想を繰り返すことによつてシマの再生がはかられていくさまが見てとれる、と言つてよいのではあるまいか。

もつとも麦穂祭は久高島と王府だけが行なっているのではない。『琉球国由来記』巻十二〜二十一の「各処祭祀」を見ると、概算二二六個所で行なっている。地域差はあるものの、麦作を行なっている大部分の地で行なうのがたてまえであつたらしい。それは王府の支配構造の中に組み込まれて成り立っていたのだろう。その詳細と現状は未整理だが、久高島のように濃密な内容を持つ例を知らない。アラホバナヤシキョマの例も奄美や八重山にあるが、それは稲の場合であつて麦の場合の例もまた知らない。だから久高島のは特異だと言えるのかもしれないが、たぶんそれは王府とのかかわりに負っているのだろう。しかしそれはまた家単位のものや村単位のものや交錯してあるのだから、久高島の独自性も否定できない。

いふならばシマを存立させるためのありかたの一つが、久高島の麦穂祭には顕著に見られるということになるのではあろう。それが王府に取り込まれ、王府が解体しても継続している理由だと考える。